第19回　教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生　【ライブ版】

2022(令和4)年12月22日　会場 円徳寺

講題 :『教行信証』行巻 一乗海釈

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

　こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。
大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。
　自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を発さん。
　自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。
　自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。
無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義　1

　どうも、こんにちは、いよいよ、今年も押し詰まってまいりました。皆さんどうでしたか。お元気そうですね。私も、田畑先生のこの会座が今年は最後になります。ばたばたして一年間走り回っておりましたけども、皆さん気を付けてくださって、コロナにもかからずに、今日までやってこれました。周りの方が大変気をつかってくださって、その代わりにホテルに缶詰とか弁当ばかりとか、立派な弁当も弁当は弁当ですからいやになってきましたけども、まあ、しかし仏教のためですので、一生懸命頑張ってきました。皆さんどうでしたか、一年間。私は大変いい年でした。家内が白血病で元気に帰ってきましたのでうれしかった。なんというか、何もしなくてもいい、居てくれたらいいとそう思いました。まあ、ありがたい年でした。つらかったけれども、まあ、皆さんの顔を見たらわかるけれども、もうそろそろ死ぬよ（笑)。楽しいことばかりを追い求めてたら人生半分になりますよ。苦しいことも悲しいことも全部いただいたものだから、だから僕は、一年間家内のことで辛かった。猫から慰めてもらうくらい辛かった。涙を流したことも何度もありましたけれども、けれどもいやではなかった。僕の人生の味よ。我が強いから、自分の思いを通そうとして苦しんでいるのですが、そういうことをよく思い知らされました。そういう意味ではまったくいやではありませんでした。皆さんも、そう思って、辛い時には、何か仏さんが教えようとしているのよ。その意味がわかってくると、辛いことも苦しいことも楽しいことも全部丸ごと自分の人生だと思って生きてください。
　今年は、私のところに来た娘の婿ですが、まったく在家で仏教なんて触れたこともなかったので

すが、私の家に来てからしばらくして、「俺は坊さんになる」と言い出して、「なんでや」と言ったら、まあ私が言うのも恐縮ですけど、「父ちゃん見てたら、かっこいい！おれは坊さんになる！」（笑）と言って、坊さんになった子が、もう１５年位になりますか、一生懸命に頑張って、資格を取って、今年は本山に出仕したのです。報恩講の出仕を。坂東曲（ばんどうぶし）というのがあるでしょう。あれもできるのだそうです。１１月２１日から２５日まで出仕しまして、私も２８日の御命日にご本山でお話（「祖徳讃嘆」）をしましたから、今年は、親子でご本山に出仕したと言うので、大変うれしかったですね。本も出していただきましたし、そろそろ死んでもいいかなと思ってますけれども、まあ、頑張って田畑先生が１０年やると言うから、誰が負けてなるものかと、どっちが早く死ぬかなあと（笑）いうようなことですが、まあ、お互いに先生とは法友ですから、命をかけて、宗祖の命がけで明らかにした『教行信証』を皆さんと拝読していくということになると思います。

それで、今日は行の巻の最後の方に差し掛かっております。最後の方で一番重要な山は、すぐにおわかりいただけると思いますが、後半は、この間申しました「行の一念釈」があって、東聖典１９３ページ（西１９０、島１２－４０）、ここに「**他力と言うは、如来の本願力なり**」と言うところから始まります。この他力と言う如来の本願力によって実現される覚りが「一乗海」として、１９６ページ（西１９５、島１２－４３）、ここに親鸞聖人の御自釈、「一乗海釈」がありますね。これを皆さんと読んでみましょうか。ゆっくりね。

「一乗海」と言うは、「一乗」は大乗なり。大乗は仏乗なり。一乗を得るは、阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。阿耨菩提はすなわちこれ涅槃界なり。涅槃界はすなわちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るは、すなわち一乗を究竟するなり。如来に異なることましまさず、法身に異なることましまさず。如来はすなわち法身なり。一乗を究竟するは、すなわちこれ無辺不断なり。大乗は、二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は、一乗に入らしめんとなり。一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ、誓願一仏乗なり。

ここまでが本願力によって実現される覚り、海と言う字をつけて「一乗海」、これまで申し上げてきましたように、自力で覚りを悟るのではない。もともと、今も、私たちは本当は生かされている仏様の一如の覚り、その覚りに凡夫のままで目を開く、だから海のような大きな、比べる必要のない世界に目を開いた、これが感動だから、世親菩薩は「**観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海**」と、こういう言葉で、他力の覚りを表してくださったのだということをこれまでお話をしてきました。ですから親鸞聖人もそれを受けて一乗海、素晴らしい言葉で他力の覚りを表すわけです。一乗海と言う本願力によって実現される仏様の覚りは、一乗と言うのはこれは大乗である。大乗は仏乗である。一乗を得るは阿耨多羅三藐三菩提を得るなり。一乗を得るというのは、龍樹菩薩が言うように空の覚りを得ることである。阿耨菩提はすなわちこれ涅槃界なり、また違う言葉で言えば、『大経』の言葉で言えば涅槃界を得る。こういうことなのだと。「**涅槃界はすなわちこれ究竟法身なり。究竟法身を得るは、すなわち一乗を究竟するなり**」。涅槃界というのは究極的には法身である。

これは僕が何度もこれまで申し上げてきましたね。「**法身は、いろもなし、かたちもましまさず。しかれば、こころもおよばれず。ことばもたえたり**」（『唯信鈔文意』東聖典５５４頁）。その一如法身から形を表して法蔵菩薩と名のって、四十八の本願を建てて浄土を建ててくださった。ですから浄土往生と言うふうに私たちが法然上人まで伝統されてきていた浄土往生は、そのまま

浄土往生で間違いないのだけども、法身に向かうのだと。浄土に向かうということは、色もない、形もない涅槃。空の覚りと言ってもいいし、法身と言ってもいい。その法身に向かうという生き方なのだと。

だからここで龍樹菩薩の空の覚り、『大経』で言えば涅槃界と言うのだと。そしてそれは法身なのだと。究極的に法身を得ると言うのは一乗を得るということである。「如来に異なることましまさず」。素晴らしいですね。「法身に異なることましまさず」。私たちが帰命尽十方無碍光如来と言いますね。これは御本尊ですが、私たちが先生の教えに触れて五体投地して、阿弥陀如来に帰命する。その如来に異なることましまさず。ですから、私たちが先生に遇って南無阿弥陀仏と五体投地して頭を下げる、そこに仏様そのものがあるのよと。「如来はすなわち法身なり」、「阿弥陀如来」と私たちは頭を下げているでしょう。如来、それが法身なのだと、如来こそ法身である。「一乗を究竟するは、すなわちこれ無辺不断なり」。一乗と言うのはほとりがない、そして絶えることがない大きな海のような世界である。それを「大乗」とこう言うのだけれども、「大乗は、二乗・三乗あることなし」。ここからは『法華経』なのです。

そもそも皆さん覚えておられますか、この『教行信証』が始まるときに、一番最初に「**謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり**」とはじまりましたね。そしてこの『大経』の出世本懐の文章がずっと引用されました。その時に、経典を引用するときに、そこだけなのですが、「徴起の文」（ちょうきのもん）と、こう言うことを申しました。つまり１５２ページ（西１３５、島１２－３）ですけども、ここに「**何をもってか、出世の大事なりと知ることを得るとならば**」と、こう言う文章を置いて、そして『大経』が引用されたわけですね。つまりこの時にも申しましたが、「出世の大事」、これは『法華経』の言葉です。出世の一大事、出世の大事、これは『法華経』が何度も使う言葉です。その言葉をここに持ってきて、どうして出世の大事、お釈迦様がこの世にお出ましになったかというと、『大経』にこうあるからですよと、いうふうに引いているわけです。その時に、あえて『教行信証』には『法華経』は一文も引用されていません。けれどもあえてこういう言葉を使うということは、これは『法華経』を中心にする聖道門の教理体系。これはほぼ完成されておりますから、膨大な教理体系があるわけですね。その教理体系に対して、他力の『大経』の教理体系をこれから説きますよと、こういう意図があって、あえて、ここで『法華経』の出世本懐と言う言葉、出世の大事　出世の一大事、こういう言葉をもって来るわけです。

ですから、これまで、みなさん私の講義を聞いておられて、どうも、今まで先生の言っておられることとちょっと違うなとお感じになったのではないかと思います。行の巻も教の巻も「往生浄土」と言うことがあまり出てこない。その代わりに、さっきも出てきたように「大乗の覚り」とか、「一乗海」とか、あるいは、その一番本は、さっき申し上げた「功徳大宝海」。世親のあの覚りの名前ですね。それを今度は曇鸞が本願力の因力と果力によって説明される。そういうことがずっと出てきていて、どこにも「往生浄土」と言うことがあまり説明されていない。その辺になると、何かちょっと違和感を感じられるかもしれません。それは、『選択集』はもうくどく言わなくてもわかるように往生浄土一辺倒です。ですから、そういう意味で『観経』の教学、念仏と往生浄土、称名念仏とそれによって実現する往生浄土と言う仏道、それを『選択集』はほぼ完成させたのです。教学としては、道綽が聖道門から浄土門を独立させた。これはお話しました。そして、ただし道綽のところの引用を見ると念仏三昧で統一されているから、道綽のところでは教

学としてはまだ完成していなかったのですよと、宗祖はそう言っている、引用の仕方で。善導の引用になると、いっぺんに称名念仏一辺倒ですから、だから称名念仏を確立したのは善導大師だと。そして、その称名念仏が確立したときに、つまり「六字釈」ですね、あの称名念仏が確立したときに浄土の教学は完成したのですと。だから中国で、思想的には道綽・善導のところで浄土の教学は完成している。それを私は引き継いで、そして、この地で具体的な現実体として浄土教を独立させる。その仕事に命を尽くした。これが法然の仕事ですね。ですから『選択集』は道綽・善導の『観経』の教学を徹底的に凝集したものです。ですから、あそこに浄土の教学が完成していると言ってもいい。

ところが、それが出るやいなや、何度も申しますように、明恵の『摧邪輪』が出て徹底的に批判された。だから親鸞聖人はその批判にどう答えるか。浄土往生というと、聖道門は「ああ、それは死んでからの話だ」と。「凡夫を救うために方便によって説かれたのが往生浄土だから、それは凡夫のための方便だ」と言って耳をかさないから、だから大乗の覚りがあるのですよと。往生浄土と言っても、これは覚りに向かう人生なのだから、なぜ覚りに向かう人生が確立したかというと、今まで勉強してきた通りですよ。お釈迦様の教えを通して阿難は阿弥陀を見たわけです。そうですね、彼の覚りを見たわけです。見たと言うのは見ただけではないよ。見たと言うのは見て覚りの世界に包まれたわけです。だから覚りの世界に向かう人生が確立した。それを正定聚というのだと。こういうことですね。

ですから、浄土教をまた法然上人と同じように往生浄土を繰り返すと、これは聖道門が耳を貸さない。そういう中で、浄土教の真実性をどう表現していくか、これに悩まれた。だから親鸞聖人の『教行信証』は、実に方法論が見事ですけれども、それに悩まれて、そして浄土往生と言うけど、これは初めから、私たちが南無阿弥陀仏と帰依したときに仏様の覚りの中に頭を下げたのだと、だから仏様の世界にこれから生まれていくという道が確立したのであって、だから往生浄土と言っても初めから、いいですか、帰命尽十方無碍光如来と頭を下げるでしょう。この帰命尽十方無碍光如来というのは果の覚りの名前でしょう。またややこしいこと言うと言うかもしれませんが、僕が言ってるんじゃない、これは『大経』がそう言っているのです。

因、これが法蔵菩薩。『大経』はこの法蔵菩薩の神話から始まりますね。法蔵菩薩が四十八願を建てて一切衆生を救うために、法蔵菩薩の発願から始まるでしょう。世自在王仏に出遇ったのです。いいですか、世に自在なるもの。これが善知識ですよ。いい名前でしょう。世に自在なるもの、世に自在なるものを初めて見た。私もそうでした。生きる死ぬということからも解放されていて、自分が死ぬということからも解放されていて、「生きることも死ぬことも仏様にいただいたものであります。」と、全部引き受けて世に自在なるもの。この法蔵菩薩が四十八願を建てて、そして私たちの救いである浄土を建立し、浄土に一切衆生が救われるために尽十方無碍光如来と言う、究極的には法蔵菩薩が、因の法蔵菩薩が尽十方無碍光如来と言う仏様にまでなってくださった。

『大経』には、仏様になって尽十方無碍光如来と他力の信心にまでなって、私たちのところに回向してくださるのだということは、『大経』ではよくわからない。これは『論註』を勉強した人はわかると思いますが、これはまた信の巻を読むときに、『論註』が長く引用されるのです。それを見ていると、法蔵菩薩が一生懸命自分の楽のために修行するのではなくて、一切衆生を救うために、そのご苦労が事細かに書かれていきます。『論註』はしつこいほどね。そして最後には「一

切衆生、私たちに真実はない」というふうに法蔵菩薩が見切りをつけてね、「もうあかん」と。「あんたらもう、どうにもならん」と。「だから私が信心と名号になる」と言って、他力の信心と他力の名号になっていく。法蔵菩薩が大行・大信になっていく。この大行・大信を回向するということが説かれるのが『大経』です。今日、岡田先生がおっしゃった、やっぱりさすがですね、「『阿弥陀経』や『観経』には法蔵菩薩が説かれていないのはなぜですか」と。そうです。『大経』には法蔵菩薩が本願を建てて、私たちの行信にまでなって命を捨てた。そして尽十方無碍光如来の果になったという、こういう大きな法蔵菩薩の神話が説かれるでしょう。ここに『大経』の中に因の法蔵菩薩が果の尽十方無碍光如来にまでなって、すべて他力のはたらきで私たちを救い取っていく。その道理が法蔵菩薩の神話として説かれていく。それが『大経』です。そうですね。

まあ、申し上げなくてもいいのですが、『大経』の下巻の最初に三輩章が説かれますね。あれは『観経』で言えば上品上生から下品下生までなのですね。ですから、『大経』の一番最初に『観経』の核心が説かれている。そこまで私は言いました。それから、『大経』の一番最後のところで、今日西藤さんがちょっと言って下さっとったけども、せっかく念仏によって覚りを得た、こういう感動を持ったとしても、身が凡夫だからいつの間にか金の計算をして、人とけんかをして、そして辛いことがあると「もう嫌だ、こんな人生は」と投げ出したくなってくる。そういうものを初めから仏さんは見抜いているのだから。私たちは一生懸命仏教に触れた人はなおさらだけど、仏教に一生懸命になって、一生懸命になるということは、結局自分が一生懸命にならないと、このままでは仏になれないのではないかと思うわけです。逆に言えば何とか念仏をして立派な生き方をして仏になろうとするわけです。それを仏様が最後に怒ります。「仏にするのは俺の仕事や」と。「お前、何をとぼけたことを言ってるのや」と。お前は仏さんの仕事を盗むからしんどいんやと。「手を放せ、ばかたれが」と言って群萌（ぐんもう）に返して、そのまんまで第十八願の世界に包んでいく。そこに『大経』が群萌の経典であることということを完成させていく。その最後のところが『阿弥陀経』になっていくわけですね。

僕らは『大経』、『観経』、『阿弥陀経』にある、後から見るから、『大経』の中に『観経』と『阿弥陀経』がありますよと言うのですが、この際はっきり申し上げます。親鸞はそう見ていなかった。一番最初の三輩章、あれが『観経』になっていったのです。『観経』になっていったのです。『観経』を産んだのです。あそこが『観経』を作ったのです。『大経』の一番最後の智慧段のところ、あれが『阿弥陀経』になっていったのです。『阿弥陀経』になって展開していったのです。だから『大経』が大本です。『観経』と『阿弥陀経』が出来ていったのです。まあ、裏付けがないので、僕は今度はそこまで書いていないのですけれども、私の周りの若い人にはそう言っています。「延塚が死ぬ前にそう言っていたと、忘れるな」と。「絶対そうだから」と。なぜかと言うと親鸞は『大経』のあの一点でしか『観経』を読まない。『阿弥陀経』のあの一点でしか『阿弥陀経』を読まない。それは『大経』が『観経』になり『阿弥陀経』になったのだと、そう見ていたのだと思いますね。だから『観経』や『阿弥陀経』には法蔵菩薩は出てこないし、本願も出てきません。大本は『大経』にあります。ここから展開したのですから、だから『大経』が真実経です。仏説『阿弥陀経』ではなくて、『観経』と『阿弥陀経』を作った『〝大〟無量寿経』です。『仏説無量寿経』と言わない親鸞は。『大無量寿経』・『大経』、それが最初から『観経』と『阿弥陀経』を包んでいるから、そこから生まれたのだから、だからこれが真実経ですから一番大事な

のは法蔵菩薩と尽十方無碍光如来、この神話が説かれている『大経』の壮大な神話と本願が説かれていること、これが凡夫を救うために説かれた経典なのだと、こう読んだわけです。わかりますね。

だから親鸞聖人は往生浄土いうふうに『観経』の教学が『選択集』で完成されたのですが、それに批判が出たから、どうして、何とかして『大経』を、法然上人の往生浄土の仏教が真理だということをどうして伝えるか、それはもう大乗仏教の究極的な覚りに帰るしかない。覚りに帰ってしまえば一乗の覚りです。そして、その一乗の覚りは大乗仏教です。書いてあるように大乗すべての人が求めているものです。だから聖道門であろうが、浄土教であろうが、この「一乗海」と言うことが究極的な仏教者の最終目標でしょうと。だから「比叡山よく聞きなさい」と。「わからないのでしたら、自力無効がわかるまでしっかり頑張りなさい」と、こう言ってるわけです。そういうふうにして、覚りにまで、究極的な覚りにまで帰って来て『教行信証』を明らかにしているために、「往生浄土」と「浄土往生」と言う言葉をあえて避けてるかもしれません。この後すぐに「正信偈」が始まりますが、「正信偈」の中で「往生浄土」と言う言葉は一度も出てきません。「証知生死即涅槃」、これは大乗の覚りそのものです。あるいは「煩悩即菩提」。惑染の凡夫が信心を起こせば「煩悩即菩提」、これはもう完全に大乗の覚りです。だから、「おい比叡山、お前たちが求めているものはここにあるよ、来なさい」と、こう言っているわけです。

こう言われると、もう聖道門は浄土教だと馬鹿にするわけにはいかない。聞かないとしょうがない。という形に『教行信証』をしているために、これまで、南無阿弥陀仏の大行・大信、これは最初からありましたね。まとめで申し上げると、私たちは行の巻の一番最初から読んできましたから、多分皆さんは忘れていると思いますが、１５７ページ（西１４１、島１２－６）、ここに「**謹んで往相の回向を案ずるに**」、往相回向によって、仏様の本願力によって実現する行信、それを「**大行あり、大信あり**」。「**大行とは、すなわち無碍光如来の名**（みな）**を称するなり**」。この行は、この「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」。この言葉は曇鸞の讃嘆門釈の文章ですけれども、「無碍光如来の名を称する」、それは曇鸞の讃嘆門釈を見たらわかりますが、皆さんわかりますね、この「無碍光如来の名を称する」と言うのは五体投地することですね。今まで偉そうに生きてきて、私が正しいと思って生きてきたけど、気が付いてみたら、人を傷つけ自分も傷つけていたと。初めて凡夫と言うことを知らされて、誠に申し訳なかったと五体投地して、初めて「南無阿弥陀仏、帰命尽十方無碍光如来」と、こう叫んだのですね。

ですからこの行は、南無阿弥陀仏と言う行は、「**すなわちこれもろもろの善法を摂し**」、諸々の善法というのは、法蔵菩薩の五劫思惟と、それから兆歳永劫の修行と考えてください。それから「**もろもろの徳本を具せり**」。徳本と言うのは修行の結果ですから、これはすべての人を仏にするということ。南無阿弥陀仏というこの無碍光如来の名を称することができれば、そこに法蔵菩薩の本願力のはたらきをいただいて、必ず私たちは仏になる。そういうことをいただくから、南無阿弥陀仏の名を称するというところに法蔵菩薩のご苦労の善法と、一切の衆生に大乗の覚りを与え仏にするという徳本、それが備わっているのですよと。こう言って、「**極速円満す**」、だから無碍光如来の名は私たちに、即、凡夫のままで、覚りを円満に私たちに与えてくれる。円満と言うのは違うものが一つになるということです。だから凡夫のままで仏様の覚りの中にある。こういう感動といただくのだと。そして「**真如一実の功徳宝海なり**」。それを世親菩薩が「観仏本願力　遇無空過者　能令速満足　功徳大宝海」とこう歌って下さったのだと。だから、あの世親の言葉

をここに持ってきて、一実の功徳宝海をいただくのであると。ここから行の巻が始まりましたね。そうですね、ですから南無阿弥陀仏一つで一切の衆生に大乗の覚り、それを与えてくださる。そういう行、そういう信だから、いわゆる聖道門の言う行とか信とは違うから、だからあえて大行、「大」と言うのは「如来」と言う意味ですから、大行・大信と。しかも、この行信が離れないのですよと、ここから始まりましたね。ですから、この行の巻の終わりは大乗の覚りが実現する。そこで締めくくられるのは当然です。ですから、これまで七祖の伝統で、ずっと行の伝統が述べられてくるのと同時に、その都度その都度、御自釈を加えるときには覚りについて述べてきています、親鸞聖人はずっと。

もう時間がないからあえて申しませんけれども、六字釈を名号解釈に変えましたね。あの時も善導大師は「必得往生」、必ず往生しますよと、こう書いてくださるわけです。ところが親鸞聖人は必得往生というのは、それは不退の覚りを得ることだと、こういうふうに不退転の覚りを得る空の覚りなのだと、こういうふうに言い換えているわけです。そして行の巻の最後は一乗海、こういう形で覚りをとらえていくわけです。その時に、わかるように、これまでずっと聖道門と、ある意味、聖道門と言うのは『法華経』を中心とする教理体系、それと対峙しながら他力の覚りを得るのですよと。往生と言うのも実は不退転を得ることですよと、こういうふうに言ってきているから、この一乗海のところでは、最後のところでは（東聖典１９６頁）、「**大乗は、二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は、一乗に入らしめんとなり**」。これは『法華経』そのものです。いつかお話をしたことがあるでしょう。お釈迦様が『法華経』を説いて、そして途中で、「今まで実は、わかりやすいように二乗・三乗を説いてきた」。二乗というのは声聞独覚です。だから、「皆さん声聞独覚になりなさい」と説いてきた。ところが声聞独覚は前から言っているように自利だけあって利他がないから、「自利利他を実現する菩薩になりなさい」と。だから声聞独覚を入口にして、「二乗を入口にしながら三乗を説いて菩薩になること、これが大切なのですよと、私は今まで説いてきました。ところが二乗・三乗を私は説きたくはなかったのです。本当に説きたいのは一乗の法なのです」。こう言うわけです。ですから冗談で言っていましたね。今まで説いてきたのは方便やと、本当のことはまだ言っていないと。僕が１０年間ここでお話をして、最後に「本当のことは言っていない」と言ったら皆さん怒るでしょう。だから怒ったのです、みんな。怒った人が出て行ったのです。それを増上慢と言うのです。ところが残った人がいる。舎利弗以下、特に優れた菩薩たちは、「これは一乗の法はわからなくてもいいから説いてください」。「いや、説いてもわからない、言葉を超えているから、法身そのものだから、説いてもわからないからいやだ」と言うのだけども、三回目でやっと説く。「三止三請」と言ってね。それはここで書いている通りです。「二乗・三乗は、一乗に入らしめんがためである」。『法華経』の教説をそのまま持って来ているわけです。わかりますね。

ここに「大乗は、二乗・三乗あることなし。二乗・三乗は、一乗に入らしめんとなり」。『法華経』の覚りはここにあるよと、「**一乗はすなわち第一義乗なり。ただこれ、誓願一仏乗なり**」。『法華経』の方は一仏乗なのです。ところが親鸞聖人はここで「誓願一仏乗」であると、こういうふうに誓願一仏乗だと。『法華経』で説かれている一乗の覚りは、実はこの法蔵菩薩の因力と果の尽十方無碍光如来のはたらきによって、私たちのような凡夫でも一乗の覚りが開かれるのだと。初め、お釈迦様の説法を聞いた阿難が「光明無量・寿命無量」と言うでしょう。あれはお釈迦様の説法の中に阿弥陀如来を見たのですね。そうですね。そして光明無量・寿命無量、光に満ちた世

界、そして永遠の命の世界に今私は目を開いたのだと叫びますね。善知識に遇う、それは世に自在なるものに遇ったのです。生死からも自在であるような先生を見た。それでびっくりして感動する。そして、その先生が生きている世界に包まれていく。光明無量・寿命無量。ただし、その時にこっち側に起こることは、今まで何でもわかっていると思って、偉そうに生きて来たけど、本当は何もわかっていなかった。苦しいことが起こると目が外に向いているから、すぐ人のせいにして文句ばっかり言って来たけど、地獄の本はお前のところにある。自我を生きて、いいとか悪いとか言って、いいものばかり求めていこうとする、その根性のところに地獄の本がある。と教えられて、人間が逆立ちしてもわからないことを教えてくださった。

だから光明無量である。光明無量の証拠は、「いずれの行もおよびがたき身」、この懺悔です。『歎異抄』（第二章）では「いずれの行もおよびがたき身」、つまり、初めて凡夫になり切った。「凡夫、凡夫」と言うけど、凡夫だと思ってないから私たちは。酒を飲み過ぎた時だけそう言う。「凡夫だからちょっと飲み過ぎた」と言って、一度も凡夫になってない。根性はいつもいい者になろうとしている。これが断ち切られて初めて「私はいずれの行もおよび難き身で、地獄一定であります」。「凡夫になりきれた」。それが光に包まれたという証拠です。

ですから果の教えに遇った時にすでに仏様の世界に包まれたという感動を持っている。「懺悔と讃嘆」。これが仏教が身でわかったときの出来事です。頭で考えてわかろうとしてもわからないことはないけど、懺悔と讃嘆にはなりません。だから救いにはならん。頭がいいから頭で狂っていったらいいんじゃ、そんなものは。頭が間に合わないようになって、どうにもならんと言っているのだから、苦しくて、苦しくてどうにもならん。それは、死ぬか生きるかと言うときは、畳たたいて泣くしかないわ。「救いなんかあるか！」と。そう、それを見抜いていたのが法蔵菩薩です。「救いなんかあるか」と言ってるのだから、「地獄一定」だと。人間に救いなんかないと、救いを放棄したのです。その時初めて、ああそう言えば法蔵菩薩は最初からそう言ってたと。「仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなりけり」（『歎異抄』第九章）と、初めて法蔵菩薩の本願が響いてきて、そして懺悔と同時に光に包まれた。大きな世界に目を開いた。

そこに私たちは初めから教えを聞くという時に、いいですか、果の覚りと言うのは聖道門では、これは人間が修行をして果の覚りを求めていくのです。ところが浄土門では、いいですか、果の覚りは先生の教えにそなわっている。だから悟らなくてもいい。尽十方無碍光如来の果のはたらきのところにそなわっている。だから、今言ったように南無阿弥陀仏と念仏に帰したという時に、初めからもう果の覚りの中に包まれた。こういう感動をいただく。だから何で凡夫なのにこんな不思議な感動をいただいたのだ、俺は凡夫なのに、覚りも悟っていないのに、どうしてこういう仏様の覚りに不思議にも目を開いたのかと。だから他力の仏教は、誓願不思議、名号不思議、それから仏法不思議、これが要です。

皆さんよく知ってるでしょう、蓮如上人がお弟子さんに名号を書いてやったのです。そうした火事になって燃えたのです。そうしたらお弟子さんは「燃えちゃった」と言いにくかったのでしょう。「蓮如上人がお書きくださった名号が火事になって、一字ずつ仏様になって空に帰っていきました」と。またうまいことを言よるなと思って（笑）、まあそう見えたのかもしれません。しかしそう言ったのです。そうしたら蓮如上人さすがです、「お前は何を言っているのか、名号は最初から仏さんなのだから、仏さんになって空に昇って行った、そんなものは当たり前じゃ。凡夫が

仏になる、それを仏法不思議と言うのだ、覚えておけ！」と言うでしょう、あれ。凡夫が仏になる。それを仏法不思議と言うのだと（『蓮如上人御一代記聞書』７８、東聖典８６９～８７０頁、西１２５６、島３０－１２）。それを説明すると、法蔵菩薩の本願力によって、凡夫に引き戻される。ところが引き戻されてみれば、そのまんまが仏様の世界です。光明無量・寿命無量やから、大きな仏様の世界に包まれる。そのままで。何でこんな不思議なことが起こるのか。誓願不思議に助けられると書いている。何でこんなことが起こるのかと言ったら、いやいやそれは自分が努力をしたのではないから、法蔵菩薩のご苦労による。そして果の覚りが開かれる。と言うふうに法蔵菩薩の因力と法蔵菩薩が最終的に仏様になったという果と、この二つが分かれて説かれている。私たちは、この因と果の真ん中にいます。どっちでも転ぶ。だから初めて帰命したときには、凡夫に引き戻されて、そのままで仏様の覚りの中にあるということに目覚めるから、だから何でこんな不思議なことが起こるのかと言うのは、因の法蔵菩薩のはたらきに尽きる。因の法蔵菩薩のはたらきによって凡夫に帰ってみれば、それがそのまま仏様の覚りですから、果の仏様の覚りが来る。果の仏様の覚りが来て、どうしてこんな不思議なことが起こるのと言えば、それは因の法蔵菩薩のはたらきだからと。こういうふうに因と果が相互に成就していく、それを本願の成就と言うのです。というふうに曇鸞大師が書いてくださっていました。

むずかしいですか、むずかしいことはないでしょう。道理としてそうなのです。だからわざわざ因と果と二つ説いた。『大経』は。もし覚りを悟れと言うのなら因の法蔵菩薩はいりません。果の覚りの尽十方無碍光如来だけを説けばいい。これを目指しなさいよと言えばいい。聖道門はそうだ。ところが因位の法蔵菩薩が説かれている。五劫も思惟し十劫も修行し、兆歳永劫に修行していると言うことは、私たちを誰一人、人間で救われる者は一人もいないということを見抜いているから、法蔵菩薩が。だから、どうしても救われないと言った時に初めて法蔵菩薩の声が聞こえる。そうですね。曽我量深がそうです。越後に帰って頭が狂っていくわけです。「救われない」と言って、「どうして私はこんなに救われないのか」と言って、雪の中で倒れて雪を叩いて泣くのです。「俺は雪を食う鬼だ」と言っています。みんなそうじゃないですか、皆さんが仏法に触れたのは、「何で救われないのか」、「何でこんな人間に救いはないのだ」と一年位言っていると、よく考えたら、自分のことは自分でわからないのが人間です。なのに、自分のことを「救われない、救われない」とわかって言っているわけで、よう気がついたら、「あっ、私が言う前に仏さんが言っていた」と言うことがわかるから、「十方衆生よ、救われない者よ、念仏を称えなさい」と言っているのですから、その「救われない者よ」と見ている目が初めて突き刺さる。そして凡夫に引き返される。

ところが、そのまんまで凡夫の分別が破られて大きな世界に目を開く。「何でこんな不思議なことが起こるんや」と。それは法蔵菩薩がちゃんとそうなるようにご苦労してくださっているから。尽十方無碍光如来の世界が私たちのところに実現するように苦労したのが法蔵菩薩ですから、「法蔵菩薩のおかげですよ」と言うふうに、救われた身から見れば、「何でこのように救われたんや」と言ったら、「いや、それは法蔵菩薩のご苦労です」と。「法蔵菩薩のご苦労によって私は凡夫に帰りました」と。凡夫に帰ったというところから見れば、また覚りが来る。そんなふうに因と果がお互いに成就しながら、「絶対他力」と言う私たちの力を一切入れないで、私たちの全部を救い取ろうとする。それが『大経』の法蔵菩薩の神話です。因と果が説かれている。だから『大経』は真実経だと。『観経』は『大経』から生まれたのだから、『阿弥陀経』は『大経』から

生まれたのだから『大経』です。『大経』が真実経です。そんなふうに凡夫を救うために仏様の方が因の本願力と果の尽十方無碍光如来にまでなって、私たちの手を一切汚さないで救い取ろうとしてくださる絶対他力の教えが、『大経』のこの法蔵菩薩の神話なのだと。わかりますかね、言っていることは。わからない人はいずれわかる（笑）。必ずわかる。だって僕が言っているのではないから。お釈迦様がそう言っているのだから、親鸞がそう言っているのだから。

ちょっといい、実に親鸞聖人と言う人は天才だから、まず、私たちがこれまで勉強してきたことをちょっと復習するよ。大行・大信と言うのは仏様のこういうことが背景にある行信。それを私たちに回向として恵んでくだる。回向として恵んでくださるというのは、「救いがない」、「この世で救いなんかあるか」と言った時に初めて聞こえてくる、向こうの方から。それを回向と言ってもいい。向こうから呼びかけてくる。苦しくて泣くでしょう。辛いと言って泣くでしょう。あれは苦しいから泣いている、辛いから泣いていると思っているでしょう。違う。その前に仏さんの方が泣いている。仏さんが泣いているのだ。ああ、気が付いてみたら、いつか言っていたでしょう、小松のばあさんが泣いて泣いてくってかかって、「救ってください、頼む」言うて、「私は２年泣いている。わかりません。法蔵菩薩の声が聞こえません」と言うわけです。「２年泣いて聞こえんか」、「はい、聞こえません」と言うから、「わかった、３年泣いとけ」（笑）と言って、「それで聞こえますか」と言うから、「多分な」と言った。もうそれは、人間の本能と言うのは恐ろしい。仏法を聞く時でも本能がはたらいているから、自分を立てたい根性が抜けない。そうでしょう。私はこれだけ勉強していると思っているのや。プロの坊さんたちと一緒に聞いているのですから、あの人はちゃんと理解しているのです。だから私はこのプロの坊さんたちよりもよく知っている。その私が救われないはずはないだろうと思って来ている。その根性が切れないと救われない。まあ、あのばあさんも困ったものや。次の時に行ったら、また友達を連れて来ている。これは関わったらあかんと思って帰ったら、今度は速達が来ていた（笑）。「東海、関東どこかあの辺に来た時教えて下さい」と言って。知らん顔しとるけど。

つまり縁にはなれるかもしれない。先生と言うのは縁になる。だから縁になれるかもしれないけども、因はあんたのところにある。法蔵菩薩が生まれないと救われません。そういうことや。だから、その手助けはするかもしらんけど、「俺は知らん、それはあんたの問題だろう」と私はいつも言ってるのや、ばあさんに。それで、「わあわあわあわあ」泣くから、そのうちに「仏さんが泣いている」と言いうことがわかるわ。あれは自分が泣いていると思っているけど、仏さんの方が先に泣いている。「我が国に帰れ」と言っている。涙として来ている、本願力が。「もう私は２年泣いた。父ちゃんが死んで、父ちゃんと結婚したときに、好きで結婚したんやけど、何かボタン掛け違って５０年ずっと反目し合って生きてきました。その間ずっと泣いてきました。そして死んだら、何でこんな生き方しかできなかったんやろうと思って、それからずっと泣きまくって２年になります。もう鬱です、助けてください」。それ全部本願力の中にある。共に生きたかったんや。一緒の命を生きたかったんや。だから喧嘩しとるのや。人間は必ず反対に出てくるからね。喧嘩したら相手の方が憎たらしいから「馬鹿野郎」と思って生きて来ているのや。ところが死んだもんだから、「馬鹿野郎」と言う相手がいなくなったら、今度は自分が恥ずかしくなったと言うわけよ。何でこんな生き方しかできなかったのかと泣いているわけよ。それ本願の中にある。本願がなければそうならん。

いい、だからものすごく難しいことなのですが、大乗仏教は迷いの本と覚りの本が一つになって

いる。わかるね。覚りの方、本願の方に気付いたら、この人は救われる。ところが本願に気付かなければ、本願があることによってかえって苦しんでいく。迷っていく。だから迷いの本と救いの本が一つになっていると言うのが大乗仏教の基本だから、親鸞もそう言うのです、これから。そうでないと転成が起こらない。もし迷いと覚りが別だったとしたら、別人にならなあかん。そうですね。それが小乗仏教です。悟った別人になる。別人にならなあかんようになるから。ところが、別人にならなくても凡夫がそのままで覚りを悟ったと言うことになるのは、本が一緒だから。だから転成、ひっくり返る。それが大乗仏教の基本です。親鸞はそれを言ってくることになります。このあとね。ただここのところは、今言ったように、一番最初に「能令即満足　功徳大宝海」、世親が、あの世親菩薩が覚りを悟ったことを、よく如来の方からすぐに覚りを実現して、私たちの根源的な願い、誰にも比べる必要がない、そういう自分にならせてくれる。そこに人類の根源的願いが満たされる。能・令・即と言う形で如来の方から他力の覚りを説いてくださったのが世親菩薩です。

世親は菩薩ですから、自分が覚りを悟ったのだと言ってもよかったのです。ところがあの人は正確に仏様の方から覚りをいただいたのだと、「本願に由って速やかに覚らしめられたのだ」とこう言ったわけです。ところが理由を何も述べていない、『浄土論』には。覚りが「何ですぐに実現するの」、「何で凡夫のところに実現するの」、その理由を今度は曇鸞が、さっき言ったように、浄土教は先生の教えに遇った時に覚りが実現するのだから、それは『大経』のお釈迦様と阿難の出遇いでもそうです。だから能・令・即と言ったのは「観仏本願力」、ここに理由があると見定めたのが曇鸞です。そして曇鸞は「仏力」と「本願力」を分けた。本願力の因力と果の仏力、因力と果力に分けて、さっき申し上げたように、『大経』には因力と果力があるでしょうと。因の本願によって凡夫に引き戻され、そこに私たちの分別を破った大きなはたらきが、果の方からやって来てくれる。こんな不思議なことが何で起こるかと思うと、「いや、法蔵菩薩のご苦労だ」と言って、因と果が同時に実現し合っていく。それが本願の成就なのだというふうに説いたのが曇鸞です。

曇鸞は偉いでしょう。あの人は偉い。僕はあの人は頭がおかしいと思っていた、最初は。わからないのです、書いていることが。だけどあの人は天才です。能・令・即の理由を因力と果力に分けて教えてくださったのが曇鸞です。だからほぼここで完成しています。曇鸞の因力と果力で、『大経』の教えとしては、もうこれで十分でしょう。世親と曇鸞のところで、なぜ凡夫が救われるかと言う理由は十分にわかるわけです。ところがもう一回親鸞は「一乗海」と、こう言ってね、いいですか、そして一乗海は、実は『法華経』が一番問題にしている覚りだけども、それは誓願によって実現するのだと言うので、「誓願一仏乗」と。これが『教行信証』の肝です。聖道門の一乗の覚りは曇鸞が言った通り本願と果のはたらき、これによって凡夫のところに実現するから誓願一仏乗である。これが『教行信証』の一番の核心になっていきます。

そういった時には、先ほども言いましたように、完全に聖道門が後ろにある、前にある。聖道門に対して浄土門こそ実質的でしょうと。あなた達に言ったことがあるでしょう。大原問答の時に法然が一人一人対決するわけですよ。その時に貞慶と言う、承元の法難の起請文を起草した興福寺の貞慶が、「お前のところの仏教なんて死んでから覚りを悟るという仏教じゃないか」と。「私のところの聖道門は今ここで覚りを悟る。こういう仏教だ。だからそれだけでもお前よりも私の方が優れている」と言ったわけですよ。そうしたら「そうですね」と言って、「私も修行をやりました。ところでお願いがありますけど、その修行で覚りを悟った人を連れてきてください」と法然が言うわけですよ。すごいでしょう。「お前も悟ってねえじゃねえか」と僕だったら言うところやけど（笑）、

ねえ、僕だったら言う、口が悪いから、「お前悟ってねえじゃないか、ばかたれ！」「悟ってねえお前がなにとぼけたこと言うとるんや、悟った人を連れて来い！」と言ったら貞慶は「うっ」と言って何も言えんのですよ。その時に法然は「いや、私は凡夫ですから、本願によってしか救われないのです」と言って「**謹んで龍樹菩薩の『十住毘婆沙』を案ずるに、云わく、菩薩、阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一つには難行道、二つには易行道なり。難行道は、いわく・・・**」（東聖典１６７頁、西１５４、島１２－１６）と、あの曇鸞の二道釈を長々と引用します。法然がしゃべります。そうしたら、３００人の庶民が聞いているから、「法然は偉い」と、「比叡山の坊さんは偉そうに、覚り覚りと言うけど、連れて来いと言ったら誰もつれて来れへんやないか」と。「私は凡夫だから本願によって救われたのです」と言って、曇鸞の二道釈を一字一句間違えず、すっと言うのです。そして「曇鸞大師が教えてくださった通り」、教えてくださっと通りと言うのは因力と果力のことを言っているのよ。本当はね。言ってもわからないけども。だから「曇鸞大師が教えてくださった通り、私は本願によって救われた者であります」と言うのです。そうしたら庶民が「うおぉ！」と声を挙げて拍手して、「法然勝った、法然勝った」と言うわけです。本当は勝ったか負けたかわからんのやけど、それで法然はもう一躍有名になるわけです。その時もそうですね、庶民は「法然は俺たちの味方や、凡夫やと言ってくれた。そして凡夫が救われるのは本願だと言ってくれた。だから念仏なんや」と言って、あの大原の三千院が念仏三昧堂になるのです。だから今度行って見てごらん、大原の仏さんの座っている上を見てごらん、黒くなっているから。あれを焚いたのです、かがり火を焚いて、あの周りをずうっと念仏三昧で廻って修行した跡です。あれから念仏三昧堂になるのですよ。だから法然と言う人は偉い人でしょう。今言った通りです。ちょっと休憩しましょう。（休憩）

講義 ２

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏。

もうしばらくお話をしましょうね。私が一生懸命になると、なんか難しくなって、皆さん眠たくなると思いますが、できるだけ一生懸命にならないようにしゃべらないといけないのですが、この辺のことは、救われるということがどういうことかと言う、核心のところになります。私は別に自分の意見を言っているのではなくて、曇鸞大師が言ったこと、親鸞聖人がおっしゃていることを言っているだけなのですが、まあ難しいと思います。聞きなれないから、大丈夫５年同じことを言い続けたらなんとなくわかるようになりますから。私は私の先生から、本願成就文の話を十何年聞きましたから、僕みたいな者でもわかるようになりましたから、必ずわかるようになる。本当のことは必ず貯まっていく、残っていく、だから大丈夫です。

４、５日前でしたかドカ雪が降ったじゃないですか。あの時、僕は函館にいたのです。函館から帰ろうと思ったのですが、函館空港が閉鎖になって、欠航になってしまって、こっちで仕事もあると思って一日遅れで帰って来たのですが、帰って来たら案の定、また仕事を増やしてくれている西藤君がね（笑）。西藤さんの聞法会でお話をした時、さすがですね、田畑先生が一番核心のところ

をお聞きくださった。それで、その時に、私は今日のような説明をしたのですが、「それではわかりにくいからちゃんと書き直せ」と西藤君から言われて、そして曇鸞大師の文章をもとにして書き直しました。「まあこれでいいだろう」と思って送ったら、「こんなもんはわからない、もう一回書き直してくれ」と言うから、遂に堪忍袋の緒が切れて、「わからないのはおまえがわからないからじゃ」とどなりつけた。しかし考えた。わからない人に「わからないのはおまえのせいだ」と言ってもしょうがない」と思って、それから起きて、わからないと言われたところ書き直しました。ですからプリント（第３２回「宇佐聞法会」講義録）を読んでいただくと、その辺のことは丁寧に書いているわけですから、一回読んでみてください。

親鸞聖人の行の巻に戻りますけれども、親鸞聖人は世親が「功徳大宝海」とおしゃってくださった他力の覚りを私は「一乗海」としていただくと、こういう言葉で押えて、そして、ここではさきほど申しましたように『法華経』ということが完全に意識の中にあって、『法華経』では二乗三乗を説いてきたけど、本当は一乗が説きたかったとお釈迦様がおっしゃった通りだと。二乗三乗は一乗に入らしめるために方便として説いているのであって、一乗こそが大事なのだ。その一乗は実は本願によって実現するから、「誓願一仏乗」なのですと、ここまでおっしゃってくださっているわけです。ここまでいいですね。

ところが、これから先、先ほど申しましたように世親と曇鸞のところで凡夫になぜ覚りが恵まれるか、と言うことを因力と果力によって、丁寧に曇鸞が説明してくださっていますから、基本的にはそこで完結しているわけです。もうそれでいいわけです。ところが親鸞聖人はもう一度、一乗海を御自釈し直します。1ページめくってください。１９８ページ（西１９６、島１２－４４）。

「**しかれば、これ等**（ら）**の覚悟は**」、覚悟と言うのはわかりますね。覚りです。「**これ等の覚悟は、みなもって安養浄刹の大利**」、浄土の功徳である。また「**仏願難思の至徳なり**」。法蔵菩薩が因の本願を建ててくださった。私たちの思い図ることができない法蔵菩薩の本願、それの究極的な至徳、これは南無阿弥陀仏になったことですが、この浄土の大きなはたらきとして、「大利」。大利というのは、聖道門の「小利」に対して、浄土門の大利と言う言葉を使います。聖道門の時には法然が小利と使うのです。これは言い出したら、また一晩かかりますから申しませんが、『摧邪輪』で問題になったところです。聖道門が得るのは小利なのだと。ところが他力の覚りは大利を得るのだと。これは『大経』にそう書いてあるから、法然がそう言うのです。そうしたら「聖道門を馬鹿にするな」と言って明恵が食って掛かるのです。その議論になったところなのです。だからこういう言葉を使うというのは、これはそういう議論を踏まえて知っているから。「安養浄刹の大利」である。浄土門の教えと言うより、もっと正確に言えば、「浄土のはたらきとして大利を得るのだ」と。こう言うと間違いないね。さっき言ったように浄土は色もない形もない法身が、色がある形はあるとして出ているから、浄土に私たちが生まれるということになれば、それは浄土のはたらきとして大利を得るのだと、こう言っているわけです。

これは、実はさっき言った明恵の『摧邪輪』の議論をよく知ったうえで、こういう文章を書いている。つまり浄土のはたらきとして大利と言うのは涅槃の覚りを得る。こういうことです。そして、それは仏願と至徳。至徳とは名号と考えてください。至徳、これは「仏願難思の至徳」、法蔵菩薩の本願、因の本願と果の尽十方無碍光如来、南無阿弥陀仏と言う至徳、それによるのだと。因力と果力によるのだと。こういう意味です。

そしてその次に行きすと、「**「海」と言うは**」、と言って、一乗海、功徳大宝海の海の説明をしま

す。「**「海」と言うは、久遠よりこのかた、凡聖所修の雑修雑善の川水を転じ、逆謗闡提恒沙無明の海水を転じて、本願大悲智慧真実恒沙万徳の大宝海水と成る、これを海のごときに喩うるなり。良に知りぬ、経に説きて「煩悩の氷解けて功徳の水と成る」と言えるがごとし**」。というふうに海という覚りは「転成」、転じて成る。石瓦礫のごとくなるわれらを金剛の黄金とせしむる。それです。石瓦礫のごとくなる我らを黄金とせしむると言うように、この本願の海と言うのは、実は、大乗仏教で言う「転成」のことです。転じて成る。「転識得知」とも言います。私たちの煩悩の意識を転じて如来の智慧を得る。転識得知。これが大乗仏教の基本的な考え方です。

ですから、本当は、なぜ凡夫が救われるかという道理については、世親・曇鸞のところで完成している。それをもう一度親鸞は、大乗仏教の土俵に乗せているわけです。そして大乗仏教では、さっき言った「転じる」ということが大乗仏教の基本的な考え方です。だから、さっき言ったように、「転じる」ということがなければ別のものならなくてはならない。そうすると別物になるということができないから、私たちは凡夫のままで仏様の智慧をいただく、転識得知。あるいは石瓦礫の如くなるわれらが黄金と転じられる。こういうふうに転じる、その大乗仏教の基本的な考え方で言えば「転成」と言うことですよと、聖道門の人に言っているのよ。みなさん「転成」ということを求めているでしょう。それは本願力の因力と果力によらなければ「転成」ということは起こらないのだと。だから本願力の因力と果力によって、仏様の世界がこっちに来るから、凡夫のままで仏様の世界をいただくと。こういうことがおこる。それは「転成」と言うことですよというふうに、もう一度大乗仏教の土俵に乗せ換えて、そしてこれまで言って来た覚りが大乗の覚りそのものなのだということを言うためにこういう作業をします。

ですから、天親と曇鸞の仕事を受けて、親鸞はもう一度、今度は親鸞のところでは、覚りは、実は、大乗仏教の「転成」と言うことですと、こういうふうに言い直していくわけです。そこに『教行信証』の性格がよくわかるでしょう。浄土教を大乗の仏教の土俵に乗せて、そして聖道門の人たちにもわかるように、大乗仏教の覚りそのものが本願による覚りなのだということを親鸞はどうしてもここで言いたかった。言わなければならなかった。だから、あえて「転成」と、これを言います。これは、さっき言ったように覚りの根と迷いの根が一緒だから、だから苦しい時がチャンスです。それは気が付くチャンス。だからこれはしんどいなとか、つらいなあとか言う時に、チャンスだから、それはひょっとしたら、さっき言ったように、言い方はいろいろやけど、「あんたが泣いているよりも仏さんの方が先に泣いているよ」と言うことでわかる人もいる。高光（大船）さんのようにおばあちゃん来て、わぁ～泣きながら「助けてくれ！」言うて畳たたいて泣いたら、「ばばあ、畳は文句言うてねえぞ！」と怒ったら、「わかった」と言った。仏様の命をずっと頂いて私たちは生きている。けども、そんなこと思ったことない。僕は、いつも僕の先生に会った時に、先生が「困っているのは頭だけや。お前の命は何も文句を言っていない。わからんか！」と言って先生が涙を流して「お前のような者を生まれた時から今まで、そして死んでいくまで責任を取ってくださっているのは南無阿弥陀仏の命や。それがわからんか！」と言ってくださったと同じことを、「畳は文句を言ってない」と言ったら、ばあさん「わかった」と言ったそうです。それは、ばあちゃんが妙好人に転じたのです。それは、迷いがそのままが実は本願なのです。苦しくて泣いているのが本願なのです。説明できない。説明してはいけないのです。ばあちゃんが気付かなくてはしょうがないのです。

前に言ったでしょう。僕は間違えて大谷大学に行った、父親に騙されて大谷大学に行った。「大

谷大学に行ってくれ」と泣かれて、騙されたと言うのはあれやけど、「たのむから大谷大学に行って」と。「どんな生き方をするか知らんけど、どんなに人から褒められる生き方をしたとしても、仏教がなかった夢のように終わる。仏教さえあれば、貧しくても豊かでも全部自分の人生になる。だから、他のことはわからなくてもいい、仏教がわかるために大谷大学に行ってくれ」と泣かれて行ったのです。そうしたらさ、その時の学長が曽我量深でした。９０歳過ぎて、小さい爺さんが出てきた、衣を着て。「この爺さんどんな人だろう」と思った。マイクより下に顔がある。今でもはっきり覚えているのは、「本学は、世間には何にも役に立たない人間を育てる学校であります。」と言ったのです。「あかん、やっぱり学校を間違えた」と思った。「あかん、こんなとこ、何の役にも立たない」。何とか産業大学とか〇〇産業大学とかあるでしょう。ああいうところは実用的にいろいろ手に職をつける。ところが「本学は社会に何も役に立たない人間を育てる学場であります。」と言われて、「この人頭おかしいと思って、やっぱり大学間違った」と思いましたよ。

そうしたら、今度は曽我量深が講義をすると言うから一回見に行こうと思って、見に行ったら、まあ京都中の偉い先生がいっぱい来ていた。これはよく話すことですが、先生が話しだすと「本願です」と話し始めると、その姿そのものがものすごく大きく見えるのです。そうしたら京都大学の助手をしていた人が大きな声で「先生、本願とは何ですか」と途中で質問した。そうしたら「あなた、本願がわかりませんか」とズカズカっとそこに行って、頭の上から「本願です！」と言うわけよ。「本願って何ですか」と聞いているのに「本願です」と言うのですから、「この人はやはり頭がおかしい」と思って、やっぱり私は大学に来たのは間違っていたと思ったけれども、あれは説明してはいけないのです。「あなた今本願とは何ですかと聞きたいのでしょう。なんで聞きたいの。それ何が知りたいの。どういうことが知りたいの。一生懸命聞いているそれが本願なんやけど、わからん？」と言っているのですね。だから「本願です。本願がわかりませんか、本願なんです」と、何分間かそれを言っていました。ほとんど頭がおかしい、けどわかるでしょう。あの人説明しないから。わかるでしょう。「訊いてるあなたの問い、それ、どこから出ているの。仏さんを訊いてるのやけど、そこまでいかんとわからんよ」と言っているのです。それが僕らはわからないから、「本願とは何ですか」と聞いたら「本願です」と言うから、「やっぱり変な学校に来た」と思ったことがありました。

要するにそういうことです。生死がそのまま覚りに変わる。生死即涅槃、そうですね、私たちの生活の中で苦しいこと悲しいこと、そこに仏様の意味がわかったら、これが、そのまま覚りに変わる。「生死即涅槃」、「煩悩即菩提」。これは「即」と言う、「転成」と言うことになる。これが大乗仏教の基本的な考え方です。小乗仏教は別のものになるから、迷いを超えて覚りを悟った阿羅漢になると、二度と迷いにかえらないというのです。これが小乗仏教です。けど、大乗仏教は覚りを悟っても、ちゃんと迷いのところで生活します。そして、その迷いの中で仏様の意味をちゃんと説いて聞かせる。それが大乗仏教の覚りですね。それを「生死即涅槃」、「煩悩即菩提」と、こう言うわけです。ところが、それは聖道門では覚りを悟った人しかできないけれども、親鸞聖人はちゃんと「正信偈」の中で、「惑染凡夫信心発」、「惑染の凡夫が信心を起こせば生死即涅槃を証知する」。これをちゃんとわきまえて、信心を起こせば本願力によって生死即涅槃、それが実現してくる。だから「どんなに苦しい人生であったとしても心配するな。頑張って生きていけ！」。それから惑染の凡夫は能発一念喜愛心、一念喜愛の信心をおこせば煩悩即菩提を証知する。そのように「正信偈」も『大経』の覚りそのままをうたっているわけです。その少し前だから、今言ったように世親の覚りを受

けて曇鸞が説明した。その覚りを一乗海として証明するけれども、それは転成と言うことなのよということをここで言っています。煩悩を持った私たちが黄金に転じていく、そこに大乗仏教の大切なところがあるのよ。こう言っています。

もう一つ、「**願海は二乗雑善の中下の死骸を宿さず**」。本願の海、如来の方から開かれてきた本願海・一乗海、その覚りは、二乗、あるいは私たちのような煩悩を持った者の死骸を宿さない。「**いかにいわんや、人天の虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の死骸を宿さんや**」。一乗海と言う海は、二乗雑善の中下の死骸を宿さず。だから私たちの虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の死骸を宿さず。ここは面白いですね。悪と言う言葉が出てこないでしょう。人天の虚仮邪偽の善業、僕らがいいと思ってやっていることがいっぱいあるでしょう。逆さまなことばかりになっていく。人間がいいと思うことをやるときには反省がきかないから、いいことを言う時にはちょっと遠慮しなさい。ちょっと立ち止まって考えなさいよ。ガガッと言ってしまうから、僕がさっき言った通りや。二、三日前に怒った、「お前がわからんからじゃ」言うて（笑）。いつの間にか西藤君を悪者にして、僕が善人に成り上がっておりまして、その後すぐに反省して電話して、「私が悪かった、ごめんなさい、すぐに書き直させていただきます」と。いいことをしているときには歯止めがきかないでしょう。それを言っているのです。人天（人間）の虚仮邪偽の善業、いいことをするときも虚仮邪偽なのですが、いいことをするときはいいと思っているから反省がきかないから、だからすぐに人を責める。あれはあかん。よくない。人を責める時はよく考えなさい。最近そんなのあるでしょう、SNS か何かでわあわあ言って。あれは自分のことがわかっていないからやね。あれは必ず振り返って来る。裁判やって負けているでしょう。ああなるのです。いいことだと思っている、本人は。それが反省がきかないから、「虚仮邪偽の善業」、「雑毒雑心の死骸」。ここは毒と言う言葉があるから悪いこと。悪いことをするでしょう時々。僕はしょっちゅう悪いことをしているけど。この悪いことをした時の死骸を宿さない。

海は死骸を打ち上げるらしいね。これは高史明さんが、私はしょっちゅう言っているように、お酒を一緒に飲むのですが、高さんがよく言っていました。私は子供ころ山口県の炭鉱で父親が働いていた。海が近かったのでよく海に行っていた。戦争で死んだ死体がどんどん打ち上げられてくる。あれ海は死体を打ちあげるのです。ここの説明の時に高さんが海と言うのは死体を打ち上げるのだと、私はよく見て知っていると言っていた。死体を打ち上げる、死体を打ち上げると同時に、ここで言いたいのは、「自力を入れない」。そう、「願海は二乗雑善の中下の死骸を宿さず」。ここも善業、そして、「いかにいわんや、人天の虚仮邪偽の善業、雑毒雑心の死骸を宿さんや」。一乗海と言う海は自力を入れない。自力の死骸を打ち上げる。そこに浄土真宗の覚りの素晴らしい内容があるわけです。

いいですか、先ほども申しましたように、私たちの努力、自力とは一切かかわりなく、法蔵菩薩の因願と果力のはたらきによって、一切かかわりなくと言うのは、むしろ私たちが、聞法し求道する、これは僕らの責任。自分の実人生の中で苦しんで、そして聞法していく。これが私たちの責任です。ところがその聞法がやがて時機が熟して自力では救われないというところまで追いつめられていって、そして、「ただ念仏して弥陀の本願に救われなさい」。それは逆に言えば、「自力で救われるくらいなら仏教はいらないのです」。こう言っています。あなたの、今泣いている深いところから仏様の声が聞こえませんか、本願の声に耳を傾けなさい。その本願によって、その本願の声が届いた時に、「帰命は本願招喚の勅命である」。初めて「帰命」ということが起こる。その時に初め

てさっき言ったように、仏様の方の覚りの方から私たちを包んでくださる。帰命尽十方無碍光如来ですから、無碍光如来に頭を下げているのだから、無碍光如来の世界に触れている。

だから、『大経』下巻の一番最初４４ページのところの本願成就文では、第十一願の必至滅度の願の成就から始まるでしょう。覚りから始まるでしょう。あれ本当は次の行、次の信、十七願の行、諸仏称名の願の成就と第十八願の至心信楽の願、行信に覚りを得るのだから、頭で考えたら行信証、十七、十八、十一とくれば私たちの頭にちょうどいいわけです。ところが十一から始まってるでしょう。覚りから。「何でですか」と聞かれた。面倒くさいけど説明できないのです、こんなのは。

僕は函館で夏の講義をしたのですが、夏の暑い時だからちょうどいいなと思って、「おい、今日みんな後でビール飲みに行くやろう」と、「カンパイ！」って、カーとビール飲んだら「おおうまい！」と言わんか。それ。「カー！うまい！」と言うのが一番最初の感動でしょう。この身の感動、救われた感動は、「わーすげえ！」と言うのが一番最初の感動。「今日が暑かったから」とか「一生懸命仕事をして疲れたから」とか、理屈は後から付く。感動の方が先に「カー！うまい！」と言うでしょう。「救われた！うれしい！」と言うでしょう。理屈は、それは法蔵菩薩の行信が実現したからですと、あとから理屈は付くのです。「うあー！」と言う方が先です。そういうものですから説明はできない。そういうことです。そうしたら「ビールの話はよくわかった」（笑）と言った。「ビールの話はよくわかった」と後から言っていたから「ばか、ビールの話とは違うぞ」と言ったのですが。そういうことです。身は正直だから身の感動が先に来る。「救われた！わっすごい！わっうれしい！」それが先、そして理屈は、それは法蔵菩薩が行信と言うことにまでなってくださったのだ。それは後から、そう言うことですよと、そう言うふうにちゃんと教えてくださる。仏教はそういうものです。

いつも言うように『涅槃経』もそうです。阿闍世がひび割れして膿が出て助からないでしょう。耆婆に連れられてお釈迦さんのところに行くわけです。「うわー！」光明無量・寿命無量のお釈迦さんのはたらきに「うわー！」と感動したとたんに体の膿が先に治る。治らないのは根性。これは死ぬまで治らないから。だから体の方が先に治る。そして後、お釈迦様が諄々と、今度は心を転じていって、そして最後に阿闍世が叫ぶのは「無根の信や」と。「自分のところにあったのではない。仏様の本願が信心になったのだ。無根の信だ」と叫ぶでしょう。あれ、体の方が先に治るからね。それと一緒、仏教は身の方が先に動くから、行信、行動の方が先、五体投地の方が先。そんなふうに一切、覚りを悟らせるときに、私たちの自力はどこにもありません。全部絶対他力の法蔵菩薩のはたらきによって覚りが来るから、だから人間の自力なんてどこにもないのですよと言うので、「願海は二乗三乗の雑善の死骸を宿さず」。自力がないのだとこう言っています。そしてそのあと、もう時間がないけども、そのあとに「転成」の証文として世親の『浄土論』が出てきます。

『浄土論』に曰（い）わく、「何者か荘厳不虚作住持功徳成就、偈に、仏の本願力を観ずるに、遇（もうお）うてむなしく過ぐる者なし、よく速やかに功徳の大宝海を満足せしむるがゆえにと言えり。」不虚作住持功徳成就は、けだしこれ阿弥陀如来の本願力なり。今まさに略して、虚作の相の住持にあたわざるを示して、もってかの不虚作住持の義を顕す。乃至 言うところの不虚作住持は、本（もと）法蔵菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る。願もって力を成ず、力もって願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願相符（かの）うて畢竟じて差（たが）わず。かるがゆえに成就と曰う。（東聖典１９８頁～、西１９７～、島１２－４５）

この文章です。これはよく勉強した人はすぐわかるでしょう。『浄土論』の文章ではありません。

『浄土論註』の文章です。なのに『浄土論』とつけてるのは、この覚りは世親の「観仏本願力」からきているのですと言うことを示すために、曇鸞がこういう解説をして、なぜ凡夫が凡夫のまま救われるかと言うと、「願と力」のはたらきによって成就するからだと言うことを曇鸞が説明しているでしょうと。しかし、これは、実は、その前に世親が歌った偈、「功徳大宝海」、それの説明なのですよということを言うために、あえて「『浄土論』に曰く」としています。本当は正確には「『浄土論註』に曰く」のはずです。ところが、あえて「『浄土論』に曰く」としているのは、この覚りは世親と曇鸞、そして私（親鸞）と伝統して来ているのですと言っている。よくわかります、これね。その次、

また曰わく、「海」とは、言うこころは、仏の一切種智、深広にして涯（きし）なし、二乗雑善の中下の屍骸を宿さず、これを海のごとしと喩う。このゆえに「天人不動衆　清浄智海生」と言えり。

「不動」とは、言うこころは、かの天人、大乗根を成就して傾動すべからざるなり、と。已上

これは世親の『浄土論』で言えば仏の大衆功徳、菩薩のことです。これは何を言っているかと言うと、わかるでしょう。皆さん、仏様に帰依する時には、どなたも「自力無効」と言うことが決定的ですね。それを通して初めて仏様の世界に目を開きますね。ですからそこで自力が切れている。これは仏の大衆功徳ですが、皆さんがよく知っている「同一に念仏して別の道なきがゆえに」（東聖典１９０頁、西１８６、島１２－３７、西七祖篇１２０、真聖全一３２５）と言うのがあるでしょう。あれは国土荘厳の眷属功徳成就。１３６ページ（西１４４６、島８－１３）の眷属功徳成就、「**如来浄華の衆は、正覚の花より化生す**」。これね。「同一に念仏して別の道なきがゆえに、遠く通ずるにそれ四海のうち皆兄弟なり」というふうに曇鸞が言うでしょう。これが国土荘厳の大衆功徳なのですが、もう一つ仏の大衆功徳で同じことを言うのだけども、仏の大衆功徳、１３７ページの６行目のところに、「**天人不動の衆、清浄の智海より生ず。**」とあるでしょう。ここに、「海」と言う言葉が出てきます。この「海」と言う言葉は、功徳大宝海、そのあと数行後、「**観仏本願力　遇無空過者　能令即満足　功徳大宝海**」の「海」。この「海」と「清浄智海生」の「海」と、この２回しか出てこない、世親の「願生偈」ではね。だからその「海」をいただいて「一乗海」と親鸞聖人はおっしゃったわけです。

その時に「転成」の方は観仏本願力、不虚作住持功徳の海ですよ。「自力を入れない」という方は「**天人不動の衆、清浄の智海より生ず**」、この海ですよと。こう言うふうにここを持ってくるわけです。「ああそうか、そんなことがどうしたか」と言いたい？　いやいや、だから「願生偈」で「海」と言う言葉が２回出てくる。それが今言った、不虚作住持功徳と「天人不動衆　清浄智海生」、この二つで海の説明を親鸞はした。一つは転成、一つは自力を入れない。如来の智慧の海から生まれるのだから、人間の知恵はいらない。

もともと、いいですか、もともとに帰りましょうか、皆さんに知っておいていただきたい。もともと、５０ページ（西４７、島１－４４）を開けてください。これは「東方偈」、『大経』ですよ。７行目のところ。ここに「**如来の智慧海**」と出てきます。この海です。『大経』にそもそも、如来の智慧海と言うのは、これは覚りの名前ですからね。この如来の智慧海は深く広くして岸がないのだと。二乗の測（はか）るところではない。「唯仏のみ独り明らかに了（さと）りたまえり」。二乗や菩薩が届かないのだ。阿弥陀如来の智慧海・覚りは広くて深いのだと言う時に、この「海」と言う字を使います。如来の智慧海。これが『大経』の覚りを表す名前だから、だから世親が『大経』の論

を書いた時に「功徳大宝海」。これは「如来の智慧海」のことを言っている。そして曇鸞を受けて親鸞が「一乗海」と言うときも、これは『大経』の覚りは「海」ですよと言っている。これは自力で悟るのではなくて、もともとある世界に目を開くのだから、悟ったのではない、私たちが転じられたのです。そういう「海」と言うのが『大経』の覚りですよと。

こういうことで親鸞聖人は行の巻を結ぶにあたって、これまで述べてきた念仏と念仏の覚り、それは大乗仏教そのものである。聖道門の人たちもよく聞いてほしいと。あなたたちが求めている一乗の、『法華経』が求めている一仏乗は誓願によってしか実現しません。そしてそれは人間の力が何も入らないから、だから、この誓願一仏乗だけは「絶対の覚り」なのだと言うので、前にも言ったことがあると思うぞ、これ。化身土の巻を開けてごらん。親鸞聖人はすばらしいね、素晴らしい自信ですよ。３４０～３４１ページ。３４０ページの最初から１０行目、２２と言う文章がありますね（西３９３、島１２－１７３）。これは善導大師の文章ですが、ここに「**心によって勝行を起こせり**」、それぞれの、私たち一人一人の心によって勝れた行を起こす。そのために「**門八万四千に余れり**」、お釈迦様の門は八万四千以上ある。それは私たち一人一人がみんな能力が違うからよ。だからそれぞれの能力と心によって勝れた行を起こすから、お釈迦様はそのために八万四千に余れる法門を説いてくださった。その中に「漸（ぜん）」と言って、だんだんだんだん、漸々に覚りに向かう道、「頓（とん）」と言うのは、すぐに。カーンと竹に当たったら「あっ」と悟るような、そんな人がおるらしい世の中に。「**漸・頓すなわちおのおの所宜**（しょぎ）**に称**（かな）**いて、縁に随う者、すなわちみな解脱を蒙れり**」。わかりますね、能力や心にいろいろ差があるから、みんなそれに応じて、それぞれの道を説くために、お釈迦様が八万四千に余れる法門を説いてくれた。それによって、まあ一人一人の身分に応じて解脱を得るのですよと。これは善導大師の言葉です。だからこれは八万四千の法門を説いてくださったお釈迦様を褒めて、八万四千の道があるのは、八万四千の人がいるからやと。こう言っているわけです。

ところが親鸞聖人は、３４１ページの最初から４行目、これ変なところで切ってね、「八万四千の門に余れり」という、「門余」。門に余る。「**「門余」と言うは、「門」はすなわち八万四千の仮門なり**」、お釈迦様の八万四千の法門は全部方便である。「余」は、門に余ったと言う、余った一つは「**「余」はすなわち本願一乗海なり**」。人間の自力に混じらないから、人間の自力に混じらないで、仏様の方から如来の智慧海が開かれて、そして人間の自力が混じらない、そういう意味で覚りを確保していく。その本願一乗海だけは、お釈迦様が救われた根本の教えなのだと言っているわけです。つまりお釈迦様が『大経』に救われたんよ。

だから、普通は仏教はお釈迦様から始まるから、お釈迦様が説いたのだというところから始まるけど、そうじゃないんだと、『大経』の本願はお釈迦様を救ったのだと。だから『歎異抄』（第二章）を見たらわかるでしょう。「**弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず**」。弥陀の本願から始まっている。『大経』の方が根源仏ですから、お釈迦様も『大経』の本願に救われたのだと。なぜなら、『大経』には人間の力が一切ないから。絶対他力のはたらきによって覚りをいただく、その覚りも人間の力が混じってない。だからこれは、もうどこを探しても仏様そのもの、それを説いたのが『大経』だから、この『大経』の本願の覚りによってお釈迦様はブッダとなったのだと、こう言っているわけです。

阿弥陀の根源仏、阿弥陀が諸仏の根源仏です。「お釈迦様を仏としたのは阿弥陀の本願力だ」と、こう言っているわけです。すごいでしょう。だから他の宗派と並べてはいけません。自信を持って

ください。別に喧嘩する必要はないけど。禅宗が何するものぞと。私たちは凡夫のままで仏になる。それがどれだけありがたいかと。そこに南無阿弥陀仏の名号と、その名号にすべて含まれている本願力と如来の智慧海、これが背景にある念仏によって私たちは「自力無効」と言うことを通して、初めて『大経』の覚りそのものに目を開くのですよと。こういう主張、これが親鸞聖人の『教行信証』に書かれている内容なのです。わからんでもいいです。十年やっていたらわかります。そのうち死ぬから、死んだらもっとわかります。必ず仏様の世界に帰って行きますから、間違いなく。それじゃまあ、今日はここまでで終わりますが、今年の締めになりますけど、どうですか、難しかったと思いますけれども、何かあれば。

質疑応答

質問者１・・先生「むなしくすぐる、むなしくすぐるひとぞなき」と言う和讃の言葉があるではないですか（「高僧和讃」、東聖典４９０頁）、私は、はっきり言うと、私は今、空しさを感じているのですが、空しいなと言うのは、凡夫だから「空しく感じることはあるさ」と空しく感じることがいけないわけではない。空しく感じると言うのは何か信心を求める一つの鍵になるのかなと自分の中では感じているのですが。

先生・・そうです。そこまで言ってくださるなら　その通りです。だから空しいことに耐えられてくる。ちょっと空しいなと言うくらいで終わるから。ところがなんもかも空しくなって、景色の色が変わるくらい空しくなる人がいる。それはそれを通して仏法を聞きなさいと言うふうに聞いてくださったらありがたいと思います。ただ一つだけ言っておきます。この「むなしくすぐるひとぞなき」と言うのは　私たちの感情の「空しい」というのを、もともと言っているのではありません。そうではなくて、本願に遇った人は必ず仏になるということが「空しく過ぎない」と言う、もともと不虚作住持功徳の意味です。人間の中でこうなった、こうなると言うふうに、例えば、いいことをしたら必ずいい結果になるとは決まらないでしょう。それを虚作といいます。不虚作というのはこうなったら必ずこうなると決まったのを不虚作といいます。だから、もともとの世親の歌をそのまま言うと「観仏本願力」、本願力に遇った者は必ず仏になるということが空しく終わらない。本願力に遇ったものは確実に１００パーセント仏になるという意味で、「空しくすぐるものなし」とうたっています。もともとは、だからそのことも知っておいて下さい。もともとはそうなのです。

　ところが曇鸞になると、今、おっしゃってくださったように、私たち凡夫に引き戻して説明しているから、浄土の清浄功徳のところで、尺取り虫と蚕の例えと二つ出てきます。その尺取り虫は、知っている通り植木鉢のまわりをぐるぐる回っている。あれはふざけているわけではなくて一生懸命生きている。けど本人はまっすぐ行っているつもりですが、同じところをぐるぐる回っている。というふうに、凡夫は何をやっても空しく終わる、という意味に曇鸞が少し広く解釈していますから、曇鸞の解釈から言いますと、おっしゃる通りです。もう一つ蚕の例え、自我によって自分を守ろうとする、みんな。ところが蚕は自分を守ろうとするために、糸で自分を守るために蚕でくくっていきます。ところが最後の一本をまき終わった時に、自分を守ろうとしていたことが孤独になります。他のものと遮断して自分独りになってしまう。だから人間の問題は孤独と言うことと、空過、

なんとかやっても空しいということが人間の問題なのだというふうに、曇鸞の不虚作住持功徳を私たちのところまでおろして説明したときに、あなたがおっしゃったように「あなたが空しい」と言うところと合致します。そんなふうに知っておいてください。

だけど曇鸞が言うように、新聞を読むときに色んな事件がいっぱいあるでしょう。あれ孤独とニヒリズム、空しいということで起こっているというふうに読んでごらん、仏さんはそう言っているのだから、人間の問題はそれしかないと言っているのだから、そこからよく読むとだいたいそうなっています。孤独で人を殺す。そして人とコミュニケーション取れないから、自分の殻にこもって、どんどん膨れて問題を起こす。だから孤独と空過、おっしゃるように、それが人間の根源的な問題なのだと。空過がなぜ起こるか、それは如来の真実と言うことを知らないで、自我が本当だと思い込んでいるから、曇鸞はそう言っています。なぜ孤独が起こるか、それは自分の自我だけが正しいと思って、それを立てるから、だからいつの間にか、そうでしょう、自己中の人が居ったら腹が立つじゃないですか。なんか自分ばかり主張する人がいると、なんかうっとうしいなと思って、結局その人は最後には除け者になる。だから孤独になったり、空しくなったりするのを僕らは外にあると思うから、空しい時にはみんなで酒飲みに行って、カラオケを歌ってワーワー騒いで、「やったー」言うて帰ってくるけど、一生そんなことをしなければなりません。内にあるのだから。だから、そんなことをしていたら私のように肝臓が悪くなります。孤独も本当は内にあるのだから、理由は。なのに、外にあると思うから、「あいつが私を除け者にした」とか、その前に多分自分が我を張っているのです。それがわかりません、私たちには。そういう意味です。だからおっしゃるとおり、それを今度はどこで、教えに遇って、「ああ、今まで空しいと思っていたのは、これは本当の自分になっていなかったから」。自我の自分が本当だと思っているから。本当の自分と、思っている自分の間に隙間があるから、隙間があれば必ず隙間風が吹くから空しくなります。だから、その空しいということが「如来の真実に帰れ」という呼び声に変わっていきますから、おっしゃる通りです。他にありますか。

質問者２・・ありがとうございました。誓願一仏乗ということが行巻の一番核心だということで、ありがとうございました。

先生・・行の巻だけでなくて、『教行信証』全体の覚りの名前です。

質問者２・・それで、今日で行の巻が終わると先生がおっしゃいましたけれども、その前の「他力と言うは、如来の本願力なり」から始まる、そこの他力釈とか三願的証と言うのが、ここ、いまの誓願一仏乗に至る一番最初の始まりというが、そういう意味なのでしょうか。そこらあたりが説明されていませんでしたので。

先生・・そうですか、わかりました、それでは説明しましょうか。ちょっと時間かかるけど、よく勉強しておられるから、よく知っておられるから、あなたが今おっしゃったことを材料にして親鸞聖人の方法論を申し上げましょう。

今、言ったこと三願的証、これはもともと曇鸞の文章ですね。よく勉強をしていますね。僕も本当は、そんなことをしゃべりたいのですが、死ぬかもしれないので、十年で終わらないといけない

ので飛ばしましたが、三願的証の説明をしましょう。世親の『浄土論』では、自利と利他を実現する菩薩になって、そして阿耨多羅三藐三菩提の空の覚りを得るのだと言うのが最終的な結論になります。そうですね、自利利他の五念門によって、自利と利他を実現して、そして阿耨多羅三藐三菩提の空の覚りを得るのだと言うのが世親の『浄土論』の最終的な結論になります。今おっしゃった三願的証は行の巻で言えばどこにありますか。１９４ページの一番最初のところ（西１９１、島１２－４０）を読みますよ。これは世親の『浄土論』ですが、

「**菩薩はかくのごとき五門の行を修して、自利利他して**（このように五念門の行を修めて、自利と利他を実現して）**、速やかに阿耨多羅三藐三菩提を成就することを得たまえるがゆえに**」と。こういうふうに世親はおっしゃってくださった。そういうことですね。それについて１９４ページの終わりから５行目、ここから曇鸞が、世親が「自利利他して空の覚りを得る」と言ってくれたのですが、「**問うて曰く、何の因縁ありてか「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と言えるや**」。どうして、何の因縁によって、すぐに空の覚りを得ると、こう世親が言って下さったのかと自分で問うて、「**答えて曰く、『論』に「五門の行を修して**（五念門の行を修めて）**、もって自利利他成就したまえるがゆえに**」と言えり」。世親の『浄土論』では、その理由は五念門の行を修めて自利と利他が実現するからだとこう言って下さっている。「**しかるに、覈**（まこと）**にその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり。**」と曇鸞が言うのです。世親は菩薩道を成就した菩薩だから、そこまで言ってないけども、『大経』によると、それは五念門と言うのも念仏のことだから、だから、「**覈**（まこと）にその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり」。こう言うわけです。ここから長く、阿弥陀如来の本願について説かれていきます。

そしてあなたがおっしゃっている三願的証と言うのは１９５ページの３行目（西１９２、島１２－４１）から、ここに、「**願に言**（のたま）**わく、「設**（たと）**い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲**（おも）**うて…**」、これは第十八願の本願力です。第十八願の本願がまず説かれます。その次、二つ目は「**願に言わく、「設い我仏を得たらんに、国の中**（うち）**の人天、定聚に住し必ず滅度に至らずば、正覚を取らじ**」。これは第十一願。そうですね。最後に三つ目、「**設い我仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、我が国に来生して、究竟して必ず一生補処**（いっしょうふしょ）**に至らしめん**」。これは第二十二願。この本願によって、菩薩が自利利他を成就すると曇鸞が解説しているわけです。そうすると第十一願、覚りを得る。それから第十八願、信心を得る。これは菩薩からすると自利になります。そうですね。そしてやがて浄土に生まれて、そして浄土から還って来て、あらゆる人を教化すると言うのが第二十二願の眼目ですから、ここは利他になる。そうですね、曇鸞はこう言うわけです。

つまり、世親は菩薩ですから、五念門によって自利利他が成就すると言うのは、菩薩の自力によって自利利他を成就しているように見えるけれども、実は本願の第十一願と第十八願によって自利を成就し、本願の二十二願によって利他を実現しているのですよと言うふうに、「自利利他の根拠は本願にある」と、こう言っているわけです。わかりますね、いいですね言っていることは。

そうするとこれは方法論としては、実は菩薩道を成り立たせているのは本願なのだと言ってるわけです。そうですね。それと同じように一切の衆生を救うものは全部本願なのだと。行の巻・諸仏称名の願、信の巻・第十八願至心信楽の願、証の巻、第十一願、そして真仏土、光明無量・寿命無量の願、化身土、巻十九願・二十願、全部本願によって仏道が衆生を救うのですよと言うのが『教行信証』の方法論ですね。あの『教行信証』の方法論の本はこの三願的証にある。そうですね。だ

から他力とは本願力ですと言ったときに、この本願力によって、実は菩薩道も成り立っているのですよ。それどころか、この本願力によって一切衆生の仏道が成り立っているのですよと言うのが『教行信証』ですから、この曇鸞の、この三願的証の方法論から『教行信証』が出来たと考えてください。素晴らしい勉強をしているわけです。その勉強は今言ったところに帰着する。

親鸞がなぜ全部の巻を本願によって位置付けるかと言うと、その本願によって、われわれ凡夫が何の力も加えないで覚りを得るからです。さっき言ったように。だから曇鸞のこの「**覈**（まこと）にその本を求むれば、阿弥陀如来を増上縁とするなり」。まるで自力の菩薩道のように説かれているけれども、本当は、実は、本願力によって成り立っているのですというのが曇鸞の了解ですから、まして、凡夫の仏道は本願力によって成り立つわけですから、曇鸞のこの、こういう方法論をそのままいただいて『教行信証』を書いた。その全体が、実は「他力とは本願力です」と、他力とは「人の褌（ふんどし）で相撲を取る」ということではない。自力に対して人の力、そんなことを言っているのではない。「本願力なのだ」ということを言うために、「他力とは本願力なのです」と言って、その後にこういう三願的証を持って来て、曇鸞はこう言っているでしょうと。これが本願力です。本願力によって仏道が成り立つのです。こういう論理展開になっていますので、そこが大事なところです。ですから、本当は皆さんと一緒に勉強しようとすると、そこを丁寧に読んでいくと、「ああなるほど、他力とは本願力か、なるほどそうか」と、そして本願力によって仏教が成り立つ、「なるほどそうか」と。だから自力は何も要らないで「一乗海」が実現するのですというところに帰着していく。

質問者２・・ありがとうございました。

先生・・いいですか、今ので。理屈はよくわかったでしょう。そういう論理展開ですから、よく見てください。そういう意味で「一乗海」と言うことが最終的な結論になりますから、だから、今日は「一乗海」のところを取り上げたと。こういうことになります。

質問者３・・本願力と仏力、因力と果力と言うところは、まだまだ全然わからないのですけど、先生の説明が足りないと思っていたから、説明を待って質問しようと思ったのですけど、時間がないのでこれだけ確認しますけど、１９９ページの、初めて気が付いたのですけど、「願もって力を成ず、力もって願に就く」。これは「本願力もって仏力を成ず」という意味なのですか。

先生・・そうです。この前書いた通りです。

質問者３・・因力、果力というこの二つがないと浄土門は凡夫が救われないと先生は簡単に言われるのですけど、今でもそれはわからないのですが、この「願もって力を成ず…」というところ以下を僕が怒られながら先生にお願いして、先生が詳しく講義録（(第３２回「宇佐聞法会」講義録）に書かれていますので、帰りに必ず、もらってない人は、読まれたらですね、質疑応答の一番最初にありますのでよくわかると思います。

田畑先生・・はい、これで時間が来ましたので終わらせていただきます。先生どうもありがとうご

ざいました。

先生・・いえいえ。よいお年をどうぞ。またお会いできたら嬉しいです。ありがとうございました。

（恩徳讃、終了）

テープ起こし、文章化：安達洋太郎さん
添削：田畑正久先生、住職

参照　：　因力と果力の延塚先生の応答。

※この講義録の１３頁、２３頁で紹介された講義録の抄出
西藤隆己さん主宰、第３２回「宇佐聞法会」大谷大学名誉教授　延塚知道先生
『教行信証』勉強会（副題：「信巻」１回目）
令和４年９月１日（木）円徳寺

（延塚先生）まず因力ですが、これは法蔵の本願力です。皆さんよくご存知のように、法蔵が一切の衆生を救いたいと思って四十八の本願を建てました、だから、これが出発点ですから因力になります。解説になりますが、本願が四十八願建てられて、それから浄土こそ一切衆生の救いであると、仏様の方が救いを準備しました。この救いというのは、いつも言っております「青色青光黄色黄光赤色赤光白色白光」（『阿弥陀経』）のように、自分の自我を中心にして比べるという生き方を超えた世界、それが私たちの救いなのです。

法蔵が浄土を建立した。そして全ての人はこの浄土で救われるから、この浄土に生まれなさいと言われて南無阿弥陀仏になってくださった。あるいは先ほどの言い方からすれば金剛の信心になってくださった。『大経』では、これを帰命尽十方無碍光如来と、法蔵の本願が最終的に我々の行信になっている。ですから、これが果です。願力と言った場合には、法蔵の本願力ですから因です。ところが果の方は仏力と言います。仏の力。ややこしいことを言うと、また混乱しそうでいけませんが、先生でしたらお分かりいただけると思いますので申し上げます。

そもそも世親の『浄土論』の観仏本願力、曇鸞はこれを仏力と本願力に分けました。こちら（観**仏**本願**力**の仏と力で**仏力**）は果、こちら（観仏**本願力**の本願力）は因。この因と果がなければ、救いが成り立たないからです。例えば、『歎異抄』第一章の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」、あれ本当は理屈から言うと、弥陀の誓願ではないです。「法蔵の誓願不思議にたすけられまいらせて」という方が理屈は通っています。ところが唯円もさすがです。弥陀の誓願不思議、仏力と因力の二つです。今から説明します。皆さん一生懸命勉強していますが、私たちが教えに遇うという時は、時期が熟して教えに遇うというのは阿難と同じです。阿難がお釈迦様の教えに遇った時に「光明無量」と、光に遇ったと言いました。だから、この仏力の用きは光明無量・寿命無量です。私たちが仏様の教えを聞いて南無阿弥陀仏と頭が下がった時には、仏様を光明無量だと言います。

先ほど話したように、人間が人間の罪なんて分かるはずがないです。人間の中に地獄の本（も

と）があるなんて、人間には絶対に分かりません。言葉によって自我が生まれた時に、「私」というものが生まれた時に仏様の世界が分からなくなったのですと私が説明したから、その説明を聞くと「ああ、そうかな」と思いますが、そんなことは分かるはずがありません。ところが教えに遇った時に、自分では分からないことを教えてくれるから光に遇ったと言います。だから仏様の覚り、仏の仏力というのは、光明無量・寿命無量として私たちのところに用いて出て来る。これによって私たちは初めて一如の世界に目を開くのです。これを回心と言ってもいいと思います。先生の教えによってズバッと言われること。親鸞だったら、二十年間苦労して懸命に自分で覚りで求めてきました。死ぬような思いをしても覚りは得られない。「どうしてですか」と法然のところに行ったら、弥陀の本願に救われなさいと全く違うことを言われた。自力によって救われることができるなら、仏教なんて要りません。「あなたは今、自分のところに用いている本願が分かりませんか。その本願に救われなさい」と言われ、決定的に自力で救われないということがはっきりした。

そして自力は地獄の本なのだと教えられます。それは人間には絶対に分からないことを教えてくださったから光明無量であると、こう叫ぶわけです。阿難がお釈迦様に遇った時もそうでした。阿闍世の月愛三昧のところを読んでもそうです。光明無量と叫びます。果の仏力は帰命尽十方無碍光如来ですから、これが果の仏の用きです。これによって一如の世界に開放されていく。「今日の阿弥陀如来」とあるでしょう。あの「今日」というのは、仏力・果力のことです。今、私は仏力に遇った。今、私はお釈迦様の説法に遇った。今、私は善智識の教えに遇った。それは阿弥陀の覚りからきた教えである。だから、私にとっては光として今、響いたのだ。その光によって（二という）相対分別を超えて、一如の世界こそが本国であるということを教えられた。

この中にもいるでしょう。今まで偉そうに生きてきたけど、凡夫に帰ってみると全て私の罪だった。誠に申し訳なかったと頭を下げた途端、これまでとは違って何か大きな世界に解放されていった。どうして、こんな大きな世界が私のところに開かれたのだろうか。覚りをさとってもいないのに。それは何と言っても法蔵が五劫の間思惟してご苦労した。そもそも法蔵が永遠に修行しているというのは、法蔵のところに仏様の智慧が備わっていて、私たちを絶対に救われない凡夫と見てるから五劫もかかっている。だから智慧が花開く。仏の智慧の花が開いて、何でこんな大きな世界に解放されたのかという時には、必ず法蔵がありがたかったからと、仏力と因力の二つによって凡夫が救われるということが実現します。こちら（仏力）だけなら聖道門になります。覚りをさとればいいのだから。

ところが、真宗は因力として本願が説かれています。その本願がどれほど有難いかと思って、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」。（『歎異抄』後序、『聖典』六四〇頁）これが因力で私のために本願に建てられていたのだと本願にかえっていく。そして、本願に帰れば、「ああ、法蔵が実現してくださった覚りが来ているのだ」というように果の覚りに臨むことができる。だから、言葉遣いによく注意していただきたいのですが、先ほど言ったように『歎異抄』の冒頭の「弥陀の誓願不思議」、あれは仏力と因願と一緒になっています。理屈で言えば、「法蔵の誓願不思議にたすけられまいらせて」と、その方が筋が通ります。ところが「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて」となっている。観仏本願力もそうです。曇鸞はこれを仏力と本願力の二つに分けましたが、。このへんが曇鸞のすごいところです。しつこいようですが、凡夫のまま救われるとすれば、仏の仏力と本願力の二つが要ると言います。覚れば

いいのですから本願力がなければ聖道門になります。ところが有難いことに、本願がちゃんと凡夫に引き戻してくれる。その都度、凡夫に引き戻してくれます。
「お前、何をやっているのだ」と、凡夫の身をよく知らせてくれる。そして最後に、凡夫は自力では助からないのだというところまで、本願がきちんと管理して準備してくださる。十九願・二十願、自力では救われないのだと、そこに十八願が展開するのだと。それは十七願の名号の光明無量・寿命無量によるのです。凡夫のまま救われるためには因力と仏力の二つがどうしても必要だからです。
（延塚先生）今のところお分かりいただけましたか。そこに浄土真宗、本願の仏道の核心があります。本願に遇った人は必ずそうなる。だけど、遇わなければ、何のことを言っているのかよく分からないということになります。
「阿弥陀如来の本願力なり、（乃至）言うところの不虚作住持」のところですが、「本法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依ってなり。願もって力を成ず、力もって願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力・願あい府うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う、と」。（同頁）
　蛇足になりますが、この文の意味を取っておきましょう。「願もって力を成ず、力もって願に就く。」とは、先ほど申した通り、善知識の真実の教えに照らされて凡夫に引き戻され、如来の因の本願に帰する。そこに本願力の道理として、本願の方から果の一如の覚りが開かれて来ます。そのことを「願もって力を成ず」と言っているのです。因の本願に帰すれば、果の仏力としての覚りを成就するのです。
　さらに凡夫のままで、覚りを悟ったのではないのになぜこんな超世の感動を頂くのであろうか、不思議なことである。この「不思議」が凡夫のまま救われた時の感動です。ですから「誓願不思議にたすけられまいらせて」とか「名号不思議」とか「仏法不思議」と言うのです。この不思議の感動に立った時には、凡夫のままでなぜこんな超世（果の仏力の一如の覚り）を得ることができたのか不思議である。私は自力無効なのだから、法蔵菩薩のお陰としか言いようがないわけです。そのことを「力もって願に就く」と言うのです。果力としての一如の感動に立った時には、必ず法蔵菩薩の本願に向かう（就く）と言っているのです。果から因に、因から果へ、と、因力と果力が相互に実現し合うことを「願もって力を成ず、力もって願に就く」という言葉で教えているのです。
　さらに「願徒然ならず、力虚設ならず。力・願あい府うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う、と」と言いますが、説明するまでもないでしょう。救われた身には、生き生きと因の本願力がはたらいているから、『大経』に本願が説かれたことはいたずらごとではない。さらに果の阿弥陀如来の大涅槃が説かれいることも、まったくむなしいことではない。
　「果の不思議の仏力と因の本願力が、お互いに成就し合いながら衆生を救うことを本願の成就と言うのです」これだけのことです。
　この不虚作住持功徳の曇鸞の了解のところ、つまり仏力と本願力に分けて教えてくださっている所に、浄土真宗の核心があるのです。それはここで説明した通りですから、何度も何度も身に染み込むまで読んでいただければ必ずわかるはずです。